

■学校経営のポイント

生成AIと情報活用能力

喜名 朝博

7月4日、文科省は「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」を公表した(QRコード参照)。「暫定的」という言葉が示すように、科学的な知見の蓄積等を踏まえ、機動的に改訂を行う予定だという。夏季休業を前に示したことは、宿題等での生成AI利用について一定の方向性を示す必要があったことによる。また、本ガイドラインの位置づけとして、「一律に禁止や義務づけを行う性質のものではない」とあり、教育委員会や学校としての考えた方を明確にしておく必要がある。



まず教職員が使ってみよう

主な生成AIの利用規約、年齢制限は以下のようになっている。

- ・ChatGPT…13歳以上。18歳未満は要保護者同意
- ・Bing Chat…成年。未成年は要保護者同意
- ・Bard…18歳以上

Bard以外は保護者の同意があれば使用可能であるが、保護者のアカウントで利用することは十分に考えられる。子どもたちが使うことを前提に、発達段階に応じて、生成AIとは何か、道具としての適切な使い方を理解させることも必要だ。道具は正しい使い方をしないと怪我をすることがある。それは、どんな道具にも共通する。そのためにも、各自治体の指針等に基づき、教職員がまず使ってみることが必要だ。そして、その教育的価値や課題を把握し、授業で活用できる場面を想定しておきたい。

批判的な活用を

生成AIを利用してレポートや読書感想文を作成し、自らのものとして提出することが懸念されている。一方、生成AIは利用者の質問の仕方によって誤った情報を正解のように生成することが知られている。生成AIの活用には、質問力とファクトチェック力が求めら

れる。そこで、授業ではここに着目し、生成AIが作ったレポートや感想文を批判的に読んだり、考える視点として参考にしたりとするといった活用方法が考えられる。使わせないという指導ではなく、いかに上手に使うかということを経験させたい。

調べ学習は充実していたか

ネット等からの情報をそのまま自らのものとしてしまう学習の仕方は今に始まったことではない。学校にインターネットが入る前、調べ学習と言えば学校図書館で資料を探し、該当する記述を書き写していた。インターネットが身近になってからは、コピー&ペーストで仕上げてしまう子どももいた。

本来、調べ学習は、様々な情報の中から必要な情報を選び取り、それを分析・評価して情報を再構成していく学習である。さらに、再構成した情報は発表することによって、価値付けされたり、ブラッシュアップされたりしていく。これまでの調べ学習は、情報収集で終わっていなかっただろうか。それもネットの最初のサイトのみで判断し、情報を比較・検討するまでに至っていなかったのではないだろうか。ネットの情報を鵜呑みにする風潮は大人も同様であり、学校での情報活用能力の育成が十分に機能してこなかったともいえるのではないか。

情報を吟味する力

情報活用能力は、言語能力や問題発見・解決能力と並ぶ学習の基盤となる資質・能力である。道具としてのICT活用によって、情報を得る方法や整理の仕方、発信方法を身につけていく。しかし、最も重要なのは、情報自体の吟味やその方法を身につけることである。生成AIも含め、得られた情報を鵜呑みにせず、その真偽や価値を自分の力で確かめるということを習慣化していきたい。

(きな・ともひろ＝国士館大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●デジタル・シティズンシップへの理解と具体的な教育内容を解説！ <<最新刊！>>

子どもの未来をつくる人のための デジタル・シティズンシップ・ガイドブック for スクール

マイク・リブル＆マーティ・パーク【著】日本デジタル・シティズンシップ教育研究会／豊福晋平 A5判／定価 2,970円



■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> をご利用ください。